

宇宙海賊の大いなる英 雄学園史

バロンレモンアームズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然の事故で死んだ少年はヒロアカ世界に転生しツーカーザーの力を手にしてヒロアカの主人公緑谷出久達と共に戦う。

目次

プロローグ	1
第一話赤き海賊誕生!!	4
第二話ヘドロ事件	10
第三話雄英高校の勧誘	14
第四話ゴミ掃除と建築会社の令嬢	19
第五話海賊の雄英入試	24
第六話雄英入学	30

プロローグ

(ん?なんだここは!?精神と時の部屋つてぐらい真っ白な所だな。よく見たら俺の格好も全身真っ白だな。)

男は目が覚めると真っ白い空間におり色々と困惑していた。

「目覚めましたか。若き少年よ。」

男が振り向くとそこには白髪で羽の生えて分かりやすく頭に輪っかのある女性がそこにいた。

「え!?あなたは誰?というかここは何処だ。まるで精神病院に閉じ込められた気分だ。」

「私は貴方達現世の人たちで言う神です。所で覚えていらつしやらないのですか?強い衝撃で記憶が一部飛んでしまったのかしら。なら覚え出させてあげましょう。」

女性が手を翳すと男の頭に記憶が流れ出し自分に何が起きたのかを思い出す。

「ああそうだ。俺はあの時飲酒運転をした挙句信号無視をしたけしからん奴が運転した大型トラックに轢かれて呆気なく死んだんだっけ。まじかあ・・・ゼンカイジャーの最終回を見て僅か1時間で死ぬとは・・・ドンブラザーズどんな話なのか気になるな。」

「あのくそろそろお話よろしいですか?とにかく貴方は死んだという事でこれから新し

「い世界に行つてそこで第二の人生を送つてもらいます。何か欲しい力などはありますか?」

「ああじゃあ、機界戦隊ゼンカイジャーに出てきたツーカイザーに変身できるギアダリンガーとセンチギアとゼンカイジユウギアをくれ。」

「分かりました。これでよろしいでしょうか?」

女性はギアダリンガーとツーカイザー、カッター、リツキーのセンチギアとゼンカイジユウギアを創造し男に手渡した。

「まじか。冗談のつもりで言ったのに本当にくれるとは……」

「他には何かありますか?あと三つぐらいは願いを叶えることができますよ。」

「え?あんななんでもありだな。そうだな。ゴーカイジャーに変身できるレンジャーキーとモバイレーツいくつかとゴーカイセルラー、グリーンジャーからゼンカイジャーまでのレンジャーも頼む。あとはレッドとシルバーを除くメンバーに容姿と性格が似た人を仲間にしたいのとクロコダイオーとゴーカイガレオンも欲しい。」

「承りました。あと申し訳ないのですがゼンカイジャーでレンジャーキーにできるのはゼンカイザーとステイシザーだけです。あのキカイノイド四人の力はレンジャーキーにする事ができません。ツーカイザーのキーの場合は貴方が一定時間変身ができなくなります。それでも大丈夫ですか?」

「ああ大丈夫だ。寧ろそれぐらいのデメリットがないと困る。その代わり変身不能の間でも戦えるようにはしてくれ。」

「ありがとうございます。キカイノイド四人のキーの代わりに彼らのコピー体を召喚できるギアを四つ差し上げましょう。まあ貴方が使用するかどうかは分かりませんが」

女性がそう口にし男がそう返すと女性はモバイレーツとゴーカーイセルラーとレンジャーキー、ジュラン、ガオン、マジヌ、ブルーンのギアを纏めて手渡す。

「次に転生先の世界についてですが少年ジャンプに連載されている『僕のヒーローアカデミア』はご存じですか？その世界に行ってもらいます。」

「ああ個性がうんたらかんたらの一人前のヒーローになる漫画だっけ？」

「はい。それです。何か彼らと同じ個性はいりますか？」

「いやいらん。ツーカーイザーの力だけで大丈夫だ。強いて言うならオールマイトに勝てるぐらいの身体と戦闘能力とフリントとハカセみたいメカニックにしてほしいのとさつきも言った通り生身でも戦えるようにしてくれ。」

「分かりました。最後に貴方の新しい名前を決めてください。それが決まり次第新たな世界に送ります。」

「じゃあイグニス・ゴールドツイカーとかで大丈夫か？」

男改めイグニスがそう言うのと女性は再び手をかざしイグニスの体が光に包まれた。

第一話赤き海賊誕生!!

「ん……ここは……確かクロコダイオーの中か。本当に俺はツーカーザーの力を手に入れたんだな。それにしてもなんで寝落ちしてるみたいになってんだよ。あとなんか心なしか身体が小さくなってるようにな。」

イグニスが目を覚ますとそこはクロコダイオーの中であり自分の身長を気にしていると上から一枚の紙が降ってきた。

『ちよつと手違いで身長を伸ばすつもりが貴方を前世より身長が少しだけ低くなっていますが一、二年後には175から180くらいになるようにしているのでご了承ください。そのお詫びに仮面ライダーや新たなスーパー戦隊ドンブラザーズをこっちの世界で貴方のテレビだけ見られるようにしておきました。』

「マジか。あの人神様なのにうっかりしすぎじゃないか？身長は166cmか。前より5縮んだか……ドンブラザーズやりバイスがまた見られるのは嬉しいな。でもヒロアカは見れなくなってるか。ヒロアカの記憶も綺麗さっぱり頭から消えてるしまあ記憶があつたら面白くないしな。」

「そうだせっかくだからヒロアカの主人公緑谷出久に会いに行くか。あいつにゴーカイ

レッドの力を与えるか。でももし断られたら別の奴を探すしかないな。」

イグニスとゴーカイレッドのレンジャーキーとモバイレーツを手に取るとクロコダイオーから出て近くのビルの屋上に着地する。

しばらく歩いてしていると近くの団地に救急車とパトカーが止まっておりイグニスが近くにいた人に話を聞くと

「ああ緑谷さんとこの奥さんが何かしらの原因で倒れたらしいんだ。無事でいればいいんだが出久の坊主は大丈夫かな？あいつただでさえ無個性という理由から虐められたりしてるらしいから引子さんが死んだらもう身が持たなくなる。」

「その出久という子はどこにいるか分かりますか？」

「今近くの公園で休んでいる筈だ。家の中も今検査中らしいからな」

それを聞いたイグニスは団地からすぐそこにある公園に向かうと出久が俯いたまま壊れたように同じ言葉を何度もブツブツと言いながらベンチに座っていた。

「おいさつきから同じ言葉を繰り返しブツブツ言っているが大丈夫か？」

「あつ……え？ごめんなさい。母さんが急に倒れて心配で……僕は夢を見ちゃダメなのかな？僕無個性で学校でも虐められて憧れの人からも『夢見るのは悪い事じゃないが現実を見る』と言われちゃって」

「いやそんな事はない。夢というのはそう簡単に諦めるものじゃない。欲しいものと同

様この手で必ず掴み取り突き進むものだ。」

「そこでだ。俺と一緒にこれを使ってその夢を掴み取ってみないか？別に嫌なら無理に受け取らなくてもいい。俺はお前の意志を尊重する。さあどうする？」

「なんだあいつら!?!異形型の敵か？取り敢えず逃げろ!!」

その声に二人が様子を見に行くとそこには多数のゴーミンとスゴーミンが暴れていた。

「なんでゴーミンやスゴーミンが!?!ザンギャックは滅びた筈じゃなかったのか？それになんてこの世界に？」

「取り敢えず早速これを使ってみるか。おいそこを動くなよ。お前にはまだ戦闘は早い。動かだつたら周りの避難誘導でもしておいてくれ。避難誘導も立派なヒーローのやるべき事だぞ。」

イグニスにはギアダリングにセンタイギアをセットし舵輪を回転させる。

「チェンジ痛快」

回せー!! ツーカイザー!!

ヨーソロー!! ツーカイに、レボリューション!!

トリガーを押しイグニスはツーカイザーへと変身した。

「ちよつと流星に今は踊りは省略するか。今の雰囲気をやつたら出久にふざけてんのか

と思われちゃいそうだからな。まお気を取り直してツーカーイに行くぜ!!」

ツーカーイザーは舵輪をタンバリンのように叩くとゴーミン達に向かって射撃攻撃と斬撃攻撃をする。

出久は避難誘導を終えるとツーカーイザーの戦闘を隠れながら見ていた。

(すごい……まるで海賊みたいだけどヒーローっぽくてかつこいいな……夢は掴み取るものか。よし僕もその力を使つて皆を救おう。)

「えっと……どう使うんだろう?これを鍵の形にするのかな?」

ゴーカイジャァー!!

出久はレンジャーキーをキーモードにしてモバイレーツを開きレンジャーキーをセットして回しゴーカイレッドにチェンジする。

「変わった!!それに体も大人みたいに大きくなった。よし……じゃあ派手に行くぜ!!」

ゴーカイレッドはゴーカイガンを発砲しながらゴーカイサーベルでゴーミン達を攻撃する。

「お前じつとしてると言ったのに……まあいい取り敢えずこいつらを一気に片付けるぞ。」

「分かった」

ツーカーイザーはギアアダリングガーを更に回しゴーカイレッドはゴーカイサーベルにレ

ンジャーキーをセットした。

回せ!!回せ!!いっぱい!!

フア〜イナルウエーブ

「ツーカイザーゴールドスクランブル」

「ゴークアイスラッシュ」

ツーカイザーはギアダリンガーから衝撃波を放ち、ゴークイレッドはゴークイサーベルから赤色の斬撃を放ちゴーマン達は爆散する。

ゴークイレッドのスマホから着信があり電話に出ると

「はい、もしもし、え?母がそうですか……」

ゴークイレッドは電話を切ると膝をつきマスクの中で涙を流した。

「おいちよつと悲しんでるところ悪いが質問してもいいか?これからゴークイレッドの力を使うという事はお前の望むヒーローにはなれないかもしれない。それどころか敵扱いされるかもしれない。それでもいいか?嫌ならまだ引き返せるからモバイレーツとレンジャーキーを返せ。」

「さあどうする?」

「いやそれでもいい……僕は……いや俺はもうヒーローになれなくてもいい。皆の笑顔と夢を守るためならどんなに汚い泥を被る。だから大丈夫だ。頼む!!一緒に戦わ

せてくれ。」

ツーカーイザーがそう言うのとゴーカイレッドは覚悟をしたようにそう返答した。

「おい、お前ら何をしている!?!」

するとヒーロー達が現れツーカーイザーとゴーカイレッドを拘束しようとする。

「やばいな。逃げるぞ。取り敢えずそのバツクルからジュウオウイーグルのキーを出せ

そしたらゴーカイチェンジと見え。」

ツーカーイザーはあるセンチギアを取り出しギアダリンガーにセットする。

『センチタイジャー!! ヨーソロー!! センタイにレポリューション!!』

トリガーを引くとゴセイナイトの幻影が現れツーカーイザーに重なった。

グランディオンヘツダーに変化して飛び去っていた。

「ゴーカイチェンジ!!」

ジュウウウオウジャァー

次にゴーカイレッドはジュウオウイーグルのキーを取り出してモバイレーツにセットしジュウオウイーグルへとゴーカイチェンジする。

ジュウオウイーグル（GR）は野生解放をし空へと飛んでいった。

第二話へドロ事件

あれから一年後ゴーカイジャーとツーカイザーはヴィジランテとして名を馳せていた。

日本中の敵と汚い所業を裏で行なっている偽善ヒーローを倒して人々を救っていた。

それにより助けられた人や警察、殆どのヒーローは彼らに感謝して本当の英雄として称えていた。

だがその一方で一部のヒーローはゴーカイジャーとツーカイザーの事を快く思っておらず「自分達の手柄を横取りする」、「所詮海賊だから奴らも犯罪者に過ぎない」など悪口を言い捕まえようとしておりヒーローの間では賛否両論が広がると同時にヒーローへの批判は高まり続けていた。

そして今田等院商店街ではへドロのような敵が人質をとって暴れていた。

周りのヒーロー達は「私二車線以上じやなきや無理」、「爆炎系は苦手だ。今回は譲つてやる。」など突っ立っているだけで何も出来ずにいた。

そこに上空から赤、青、黄、緑、桃の5人が人質に当たらないようにへドロ敵に向かって発砲した。

「誰だお前ら!!」

「巷で噂の海賊戦隊だ」

「ゴーカイレッド!!」

「ゴーカイブルー!!」

「ゴーカイイエロー!!」

「ゴーカイグリーン!!」

「ゴーカイピンク」

「二二海賊戦隊ゴーカイジャー」

「派手に行くぜ」

「取り敢えずゴーバスターズで行くぞ。二人共」

「ああ」

「あいよ」

「二二ゴーカイチェンジ」

ゴッバスターズ

レッド、ブルー、イエローはゴーバスターズにゴーカイチェンジすると

まずはブルーバスター（GB）が怪力で地面を思いっきり叩くと人質がヘッドロ敵から剥がれ落ち上空に飛んだところをイエローバスター（GY）が脚力で飛び上がり人質を

受け止める。

次にレッドバスター（GR）が高速移動でヘドロ敵に攻撃を与える。

「そろそろ終わりにするか。ハカセ、アイム。最後はタイムレンジャーで行くぞ」

「分かった」

「承りました。」

「[[[[「ゴーカイチェンジ」]]]]」

タ〜イムレンジャー

5人はタイムレンジャーにゴーカイチェンジするとボルティックバズーカを構えヘドロ敵に向けて「プレスリフレザー」を発射しヘドロ敵を圧縮冷凍する。

元のゴーカイジャーに戻った5人は駆けつけた警察に圧縮冷凍したヘドロ敵を渡しそのまま去ろうとするとその場にいたヒーロー3人が5人を捕まえようとすると

「本当変わんないな。お前達偽善者は!!というかお前ら実際何もしてないだろ。しかも人質に対して謝罪もせず勧誘とはふざけてるのか!!はつきりいって警察の方がまだ頼りになるし有用だ。さっさとヒーローやめて転職でもしてろ!!」

ゴーカイレッドがそう言うのと周りの人達もヒーロー達を責め立てるとデステゴロが周りの人達と人質に謝罪するとゴーカイレッドにお礼と謝罪を言った。

5人は召喚したゴーカイガレオンに乗り込むとその場から去っていった。

一方その頃ツーカイザーが敵を次々に退治していきその場から去ろうとする。後ろの方から捕縛布が飛んできてツーカイザーはそれを避けようとするが左腕が拘束されてしまった。

「ヴィジランテのツーカイザー君だね？急に後ろから拘束しようとしてすまないね。相澤君離してあげて。」

後ろからスーツを着た鼠のような小動物が声を掛けると捕縛布が解けた。

「やあネズミなのか犬なのか熊なのかその正体は校長さ。まあそこは置いておいて私たちは君達と雄英に来てもらって話したいことがあるんだ。すまないけどゴーカイジャーの5人をここに呼んでくれないかな？」

第三話雄英高校の勧誘

「やあよくこの雄英に来てくれてありがとうなのさ。すまないね。君達の貴重な時間を私達の為に潰してしまつて」

ゴーカイジャー5人とツーカイザーは雄英の校長室におり校長の根津と雄英教師である相澤消太が腰掛けていた。

「早速で悪いがお前達の顔を見せてくれ。マスクで顔が隠れているから何処の誰なのかが分からん。それじゃあ合理的ではない。」

相澤先生の言葉にピンクとグリーンは変身を解除して腰を掛けるがレッド、ブルー、イエロー、ツーカイザーは変身を解かず警戒を緩めないまま二人に武器を向けていた。

「ちよつと四人共!!折角話を聞いてくれるのになんで武器を向けてるの!?!」

「私もこの方々とは話を通じそうなのでなるべく穏便に事を進めたいです。だからマーベラスさん達も変身を解除して武器を下ろしてください。」

二人がそう言うのと四人は渋々変身を解除してソファに腰を掛けるが出久とイグニス
は武器を下ろさずにいつでも攻撃する準備をしていた。

「少しでも何か変な動きしたら切るからな。まあ殺しはしないが暫くは再起不能にして

やる」

「おいそれは俺達のセリフなんだが……まあ無理もないかいきなり連れてこられたんだ。じゃあ次は自己紹介してもらっていいか？」

「断る……と言つてもハカセとアイルムがうるさいからな。じゃあ俺からだ。ゴーカイレッドこと緑谷出久だ。こいつらからはマーベラスと呼ばれてる。次はお前だ。ジョー。ルカもジョーの次に名乗れよ」

「ああ俺は剣崎条……ゴーカイブルーだ。」

「私は仙葉瑠夏。ゴーカイイエローよ。というかどうせあんたら私達の事わかるんでは？ なんていちいち聞くのよ。」

「僕はドン・シールドです。ゴーカイグリーンです。よろしく願います。あつ因みに皆からハカセと言われています。」

「私は壱俗哀夢と申します。またの名をゴーカイピンクです。以後お見知りおきを」

「最後は俺だな。俺はイグニス・ゴールドツイーカーだ。言わなくてもが分かるな？ あと言つておくが俺も五人も無個性だ。」

「態々名乗つてくれてありがとうなのさ。では本題に入りたいがいいかな？」

「ああ好きにしろ。だがなるべく早く話を済ませろ」

根津校長がそう問うと出久がそう返し相澤先生が話を始める。

「では話に入ろう。お前達は一年間の間ヴィジランテとして敵やヒーローでありながら薬や臓器などの違法取引などをしていた奴らを倒し市民を幾度となく救ってきた。一部のヒーローや警察はお前達を英雄視して讃えている。だがそれを快く思わないヒーローが殆どだ。

でもそいつらは所詮金や名誉でしか動かない不合理な奴らだった。

そんな奴らに比べお前達は海賊とは名乗ってはいるが何も悪いことはしていない。」

.....

「で何が言いたい？イレイザーヘッド、普段合理的な考えのお前が俺達の事を認めるのか？あんたなら頑なに認めないと言いそうだが」

「確かに最初はそうだっただが今の現状は俺達ヒーローの批判は高まり続けている。このままではヒーロー社会が崩壊して敵の思うがままになってしまう。だからお前達と協力関係になり今の現状を良くしなくてはならない。お前達を認めず敵扱いしてしまえば更に批判は続き挙句の果てには魔女狩りならぬヒーロー狩りが始まりヒーローを指す未来ある子供にまで危険が及んでしまうかもしれないんだ。だから頼む俺達と協力してくれ。」

「僕からも頼む。何よりもあれ程人に尽くしたくれている君達を敵と思いたくはないんだ。この言い方だと僕達が不祥事を隠蔽して責任から逃れようと思われだ

ろうけどどうか僕達と協力してくれないか？」

相澤先生と根津校長が六人にそう言い頭を下げると

「話は分かった。だがそれだけでは協力する事はできない。

と言うかたつたそれだけで俺達が簡単に協力するとしても思ってるのか？」

そもそも俺はヒーローが嫌いだ……協力なんて冗談じゃないといたいが、そうだな。お前達は知ってるだろ？ルカが孤児院で育つて俺達の仲間になる前は義理の弟妹達の為に何をしていたか。俺達も沢山恵んでやりたいが少ししか恵んでやる事ができない。実際この間も何者かの危害が及んでしまった。だから俺達の代わりにその孤児院に毎月大金と食べ物寄付しろ。それなら考えてやつてもいい。」

「分かったのさ。喜んでその孤児院に出来るだけ寄付させてもらうのさ。何よりこれが償いになるかもしれないからね。」

出久はそう告げると根津校長はその条件を受け入れてた。

「では俺達が頼みたい事は一つだ。この雄英に入学して生徒になってくれ。今みたいに何かしらの条件をつけてくれても構わない。」

「ならまずは俺達のこの格好纏い私服で雄英に出入りする事を許可しろ。だから制服はいらん。理由は俺達はヒーローの駒や道具ではないからだ。二つ目に六人共同じクラスにしろ。別々のクラスには絶対にするなよ。三つ目は必ず怪人が現れた時は学校か

ら出る事も許可しろ。

最後にイグニス除く俺達が使うレンジャーキーは生徒と教師にも一切貸し出す事は禁止だ。お前達はこれも狙ってたんだろ？残念だったな俺達が他人においそれと貸し出すと思っただのか？もしそうなら敵の手に手に渡ったら大変な事になるし何より歴代の戦隊達の顔に泥を塗るからだ。今はこの四つだけだがこれらを許可したら入学してやる」

出久の条件に相澤先生は頷くと六人に契約書にサインをするように言いそれぞれ六人は契約書にサインをした。

第四話 ゴミ掃除と建築会社の令嬢

出久とイグニスは今海浜公園でゴミ掃除をしていた。

「これで漸く海岸のゴミ掃除が終わるな。それにしてもよくあそこまで放置されてたものだな。というかヒーローまでここにゴミを捨てるとはけしからんな。」

「ああ、敵を倒すだけがヒーローじゃないからな。こういった奉仕活動もする大切な事を最近の奴らはそれが全く分かっていない。まあ海賊がこんなことやるのも柄にもないって言われるかもしれないが、あと明日は確か雄英の入試試験だったな。本来俺達はジョー達と一緒に推薦の方を受ける予定だったらしいが雄英に受ける奴らを見定める為だ。だから一般の方を受けるんだったよな。」

「あのうちよつといいですか？もしかしてゴーカイジャーの方々ですか？」

すると後ろの方から茶髪で首にマフラーを巻いた出久達と同一年であろう少女が話しかけてきた。

「ああそうだが・・・何故分かった？俺もこいつも仲間以外に顔を見せた覚えはないんだが、と言うか誰？俺はお前に初めて会うんだが」

「あつ私は麗日お茶子です。この前は私の両親の会社の経営を良くして下さってありが

とうございます。」

「麗日……そうか。確か前にルカが柄にもなく支援した建築会社の娘か。だが礼を言うならルカ本人に言ってくれ。あいつ一人がやった事だ。俺達は関わっていない。あとなんで俺達がゴーカイジャーだと分かったのかも聞いてるんだがそれも答えてくれ。」

「実は前に貴方達が変わる所を見ちゃって……でもヒーローにも警察にもあの事言っていないので大丈夫です。あと他のゴーカイジャーの人達は何処へ？支援してくれたルカさんって人にもお礼を言いたいんですが」

「まじか、まさか見られてた時があつたとは俺もちよつと迂闊だったか。ああ今日ルカなら育てられた孤児院に帰って子供達と会ってるよ。」

他の3人も修行なり墓参りなり実家に帰るなりしてゐるぞ。」

「そういえばあの建築会社は三重県にあるはずだ。何故こんな所にいる？明らかに旅行に来たわけじゃ無さそうだし。ご両親はどうしてるんだ？」

「実は雄英に通う為に上京してきたんです。お父ちゃんもお母ちゃんも一緒にきてくれて。私前まではお金稼いでお父ちゃんとお母ちゃんを楽しませる為にヒーローを目指すつもりだったけどルカさんが支援してくれたからお金を稼ぐ必要はなくなつたと思つたけど私は元から人の喜ぶ顔が好きで人々を笑顔にするヒーローや孤児院の子達にお金を稼ぐルカさんの姿に憧れて改めてヒーローを目指したいなと思つて」

「そうか……金の為言うのは気に食わんが両親の為にやろうとしてる気持ちそのものは立派だ。寧ろ昔の俺よりも遥かにな。俺はたった一人で無個性の俺を育ててくれた母親を死に追いやった……つまり殺したも同然の事をしてしまった。」

そんな俺を捨てずに最後まで育ててくれた母親を俺は恩を仇で返した恩知らずだ。」
「さて話は変わるがお前の夢と努力を否定してるみたいだし俺もこんな事言いたくないが、お前の以前の夢の金稼いで両親を楽にさせるについてだが必ずしも稼いだ金が善良な行いから出たとは限らない。それどころか殆どヒーローの行いとは程遠い汚い事に稼がれた金の方が多い。そんな金を受け取ってもお前もお前の両親も喜ばないだろ？もしヒーローになったら場所にもよるが今言った事を嫌がおうが無理矢理やらされるかもしれないんだぞ？そんなの嫌だろ？俺はお前に俺のようになって欲しくないし嫌な思いさせたくないんだ初対面の人間に言うのも変だがまだお前は引き返せる。さあどうする？言っておくがヒーローになる代償はかなり大きいぞ」
「いえ、それでもうちは貴方やルカさんみたいなヒーローになって人々を笑顔を試みます。そんな汚い事をする人達には絶対に屈しません!!勿論貴方の言いたい事も気持ちも分かります。けど貴方達が他のヒーロー達から悪者扱いされてまで戦っているのに指咥えてただ見てるなんてできません!!私も貴方達みたいに子供達の未来を守りたいんです」

出久が諭すように言うのと麗日さんはそう強く二人に返した。

「ちっ!! そうか・・・なら俺はこれ以上何も言わない。ただこれだけは約束しろ。絶対に両親を大切にして悲しませるなよ。これを破ったら許さないしヒーローになる事も必ず辞めさせるからな。まあ例え死に掛けても俺が強引にでもこの世に戻してやるから、あと俺とこいつはお前と同じ年だ。だから敬語使わなくていいしタメ口で構わない。」

「いや一つだけ忠告をしておく。お前の行動次第で例えその気がなくとも他者を嘲笑ったり笑顔を簡単に奪ったりする事もあるから気をつけろよ。もしそんな馬鹿なことしたらお前を容赦なく叩き潰して二度とヒーローになれなくしてやる。いいな!! 言っとくけど冗談じゃないからな。本気だ」

「え? 貴方達うちと同じ年だったん? 確かに童顔だけど雰囲気的にてつきり年上かと思ってたのに・・・あっはい。気をつけます。」

「童顔は余計だよ・・・ていうかなんでエコバックなんか持つてるんだ? そういえばこの時間帯は近くのスーパーの特売やってるとか言ってたが」

「あっ!! お母ちゃんにお使い頼まれてたんだっ!! すみません。うちはこの辺で失礼します!! 早くしないと特売が終わっちゃう。」

麗日さんは出久にそう言われ自分の用事を思い出し走りながら去っていった。

「所でお前はなんて顔してんだ!! さっきから殆ど会話に入ってきていなかったが」

「あっイヤー。お前も変わって成長したなと思って。俺が最初会った時は子羊みたいで可愛げのあるオタクっ子だったのに、いつのまにかこんなツンデレで遅しくなってなんか感激だな。ちよつと口調が辛辣なドSっぽくなったけど」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ。一年も経てば色々変わるに決まってるだろうがそして俺はツンデレじゃない!!あと誰が子羊だ!!」

第五話海賊の雄英入試

出久とイグニスは今雄英の試験会場におり少し時間が経つと実技説明担当のプレゼントマイクが現れた

「受験生のリスナー達!!今日は俺のライブによるこそ!!エビバデイセイハイ!!」

実技試験の説明担当のプレゼントマイクが受験生達に向かってそう叫ぶが誰一人反
応せずシーンとしていた。

「おい。なんだあのうるさい金髪男は?あんなのが今から試験の説明するのか?うるさ
くて鼓膜が破けそうになるんだが。まさかあの男もプロヒーローなのかよ? (小声)」

「確かあの男はボイスヒーロープレゼント・マイクだ。どうかお前の方がこういうの
に詳しいヒーローオタクだった筈だが。まあ無理もないか。ゴーカイレッドになつて
からお前ヒーローも個性そのものが嫌いな上興味も0になつたからな。無理もない。

(小声)

「おつとこいつはシヴィー!!では今から実技試験の内容をパパッと説明するぜ!!じゃあ
まずは十分間市街地演習を行なってもらうぜ。因みに持ち込みは自由だ。この後はそ
れぞれ指定された場所に行ってくれ。」

「会場には三種の仮想敵を配置しておいたからリスナー達の個性で行動不能にしてポイントを稼いでくれ。あと他のリスナーへの攻撃は当然違反行為だ。」

「質問よろしいでしょうか!? 記載書には三種の敵が記載されていますがどういう事でしょうか? これが誤載であるなら雄英が絶対にしてはいけないミス!! 僕達受験生はヒーローの基本となるべく指導を求めてこの場に座しているのです」

すると出久達の席のだいぶ前に座っていた真面目そうなメガネ少年がプレゼントマイクに質問した。

「OK、OK!! いい質問をありがとう。その件は今から説明する所だ。」

だから誤裁ではないか安心してくれ。四体目のポイントはZERO。つまり攻撃しても無意味だ。即逃げる事をお勧めするぜ。」

「では最後にこの雄英の校訓をプレゼントしよう。かの有名なフランス皇帝ナポレオンは『真の英雄とは人生の不幸を乗り越える者』と言った。では良き受験を」

プレゼントマイクの説明が終わり出久はA会場、イグニスはD会場へとそれぞれ指定された会場へと向かった。

出久 sign

「本当に大丈夫かよ。あいつらは一応外に口出しはしないし他の受験生には言わないように口止めしておくと言ってたがまあいいだろ。」

「ゴーカイチェンジ!!」

ゴーカイジャアアア!!

出久はモバイレーツにレンジャーキーをセットしてゴーカイレッドに変身すると自分を見る周りの目と声を気にせずにプレゼントマイクの号令と共に走り出した。

「ゴーカイチェンジ」

ジユウレンジャアアア

そしてティラノレンジャーのレンジャーキーをモバイレーツにセットしてティラノレンジャーにゴーカイチェンジするとティラノレンジャー専用武器の龍撃剣を使い次々に仮想敵を破壊していった。

「多くなってきたな。ここは天装術を使いたいが他の受験諸共吹き飛んで妨害になってしまいかもしれんからな。これでいくか。」

「ゴーカイチェンジ」

ハクリケンジャアアア

「超忍法!!影の舞!!」

次にハリケンレッドにゴーカイチェンジすると大量の仮想敵の周りに障子のエフェクトが現れ次々に仮想敵に攻撃していき他の受験者を助けレスキューポイントも稼いでいると巨大なOPの仮想敵が現れそれを見るなり他の受験者は尻尾を巻いて逃げて

いった。

「なんだあいつらは、あれでもヒーロー志望なのか？情けない。ん？」

その光景を見たハリケンレッド（GR）が呆れていると仮想敵の近くに瓦礫に挟まれた少女がいる事に気づいた。

「あいつは昨日の・・・何やってんだ。俺との約束をもう忘れたのかよ・・・」

「待ちたまえ!!君はあの仮想敵の相手をするつもりか？あれのポイントはZEROだぞ？プレゼントマイクも逃げた方がいいって言ってたはずだろ？」

「確かにな。だがな。その忠告を鵜呑みにして逃げていては人を救う事は到底できない。だから俺はあいつを倒す。」

「ゴーカイチェンジ」

シ～ンケンジャア～

先程プレゼントマイクに質問したメガネの少年がそう言うがハリケンレッド（GR）はそう返しシンケンレッドにゴーカイチェンジしてシヨドウフオンを取り出すと『守』のモチカラを書き麗日さんの周りに結界を張り仮想敵からの攻撃から麗日さんを守った。

「烈火大斬刀・百花繚乱!!」

シンケンマルを烈火大斬刀に変化させるとシンケンレッド（GR）は飛び上がると烈

火大斬刀を仮想敵に向かって振り下ろし仮想敵を一刀両断にし破壊した。

イグニス side

「出久と別々の所になってしまったか……まあ俺達が同じ所だと仮想敵全部壊して他の受験者がポイント取れないから仕方ないか。」

「チェンジ痛快」

回せー!! ツーカイザー!!

ヨーソロー!! ツーカイに、レボリユーション!!

ギアダリンガーにセントアイギアをセットして舵輪を回しトリガーを押しツーカイザーに変身するとプレゼントマイクの号令と共に走り出した。

早速大量の仮想敵がツーカイザーを囲うがツーカイザーは慌てる事なく

腰のツーカイバツクルからあるセントアイギアを取り出しギアダリンガーにセットした。

回せー!! シーケンケンジャー!!

ヨーソロー!! シーケンケンに、レボリユーション!!

「クールに侍、シンケンフォーム……いざ参る」

シンケンフォームにフォームチェンジしたツーカイザーは次々に仮想敵をソードモードにしたギアダリンガーで破壊していきそれと同時に他の受験者を助けレス

キューポイントを稼いでると巨大なOPの仮想敵が現れそれを見た他の受験者は背中を向けながら情けない声を出し逃げていった。

「なんだこいつらは軟弱な。本当にあいつらヒーロー志望かよ。まさか出久の所も……まあいい。さつさとこいつを倒すか。」

回せ！回せ！いっばーい

「痛快斬、シンケン一閃!!」

シューンケンにドツキューン!!

ツーカーイザーはギアダリングガーに烈火大斬刀の幻影を纏わせ仮想敵をあっという間に一刀両断にし仮想敵は爆散した。

第六話雄英入学

雄英入学式当日の日出久は今墓地に墓参りしに来ており緑谷家と彫られた墓石をまず水で清め次に花を手向けるとしやがみ手を合わせた。

「母さん……俺今日から以前は通いたかった雄英の生徒になるんだ……と言ってもヒーローとの協力の為と護衛するからなんだけどな。」

此処に来るたび何度も言っているがごめん。ヒーローになりたいなんて我儘言つて沢山迷惑かけた上死なせちゃつて……。だがどうかこんな親不孝な俺（息子）を父さんと一緒に空の向こうで見守つてくれ。これ以上未来ある奴らを俺みたいにさせないしヒーローになるなんて馬鹿な事を考えて親を悲しませる奴らも増やさないから……と言つてもこの間ある建築会社の娘の背中を押すという矛盾な行動をしてしまつただけだな」

出久は立ち上がりながらそう言うとその場を立ち去つた。

「悪いな。イグニス。俺の墓参りで時間をかけてしまつてどうしても母さんに報告したくてな。」

「いやいいさ。まだまだ時間はあるしこれからガレオンとクロコダイオーで行つても時

間通りに間に合う筈だ。それと何も知らない俺が言うのもアレだがお前のお母さんが死んだのはお前のせいじゃない。だからそんなに気を病む必要はない。お前のお母さんもお前を恨んだりしてない筈だ。ほら行くぞ。4人が待ってる」

墓地の外で待っていたイグニスとそう会話をして出久は他の4人が乗ってるゴーカーオンに、イグニスはクロコダイオーに乗りそのまま雄英高校へと向かった。

暫くして雄英につき出久達は自分達のクラスを確かめると

「えーと俺達は・・・え？ヒーロー科1年S組!?そんなのあつたか?確かヒーロー科はA、Bの2クラスしかなかった筈だぞ?どうなってるんだ。」

「確かマーベラス・・・お前が必ず6人同じクラスにしろと言ったから俺達専用のクラスが作られたんじゃないか?」

「でも大丈夫かなあ?失礼だけどヒーロー志望なのに怖い顔の子とかいないといいけど・・・というか仮にいたとしても会いたくないなあ」

「何言ってるのよ。あんたはそんなだから周りからしよつちゆう弱いと思われて舐められるのよ。というかそこら辺の有象無象よりかは頭いいし強いでしょ!?まあ戦い方が可笑しいけど」

「私は他のクラスの方々や先生方とも仲良くしたいのですが・・・あとハカセさんはいつまで私にくっついてるんですか?」

「兎に角こんな所で立ち止まってないでそのクラスに行くぞ。出久、ジョー、ルカ、ハカセ、アイム。早くしないと入学早々遅刻扱いされるぞ」

そして6人はS組のクラスに向かい少し彷徨いながらもS組のクラスに着いた。

「はあ、やっと着いた。聞いてはいたが広すぎる。と言うかドアがデカいな。」

「まあどんな個性持ちでも入れるようにしてるんだろ。」

出久がドアを開けるとそこには黄色いマントをつけた小柄の老人がそこにいた。

「お思ったより遅かったな。」

「あんたは確かグラントリノか。何故あんたが此処に？てつきり担任は相澤かと思ったんだが」

「元々一年間だけだが此処の教師をしてた事がある。俺は根津校長に数少ない面識のある俺がお前達の担任になるように頼まれて復帰した」

「取り敢えず一年A組に行くぞ。殆どお前達は相澤のクラスと合同で行動するらしいぞ。因みに入学式は飛ばすらしい。お前さんも出るのは嫌だろ？分かったら変身して今すぐ向かうぞ。」

老人もといグラントリノはそう言い6人に変身するよう促し6人は変身してグラントリノと共にA組の教室に向かった。

「お友達ごっこなら他所でやれ。此処はh「何してんだ。貴様は!!見るからなみつとも

ない格好をしやがってまるでヒーローというより不審者じゃないか。本当にお前雄英の教師か!？」

A組の教室の前には寝袋に入って10秒チャージを口にしてる相澤先生がおりゴーカイレッドはそう言いながらゴーカイガンを相澤先生に向けた。

「一体何をするんだ。緑谷。これが一番合理的なんだよ。まあいい。静かになるまで8秒掛かりました。君達は合理性に欠くね。取り敢えずこいつを見て興奮する気持ちは分かるが落ち着け。取り敢えずこれ着てグラウンドに出ろ。お前もこれをあいつらに渡せ」

相澤先生はゴーカイレッドを見てざわつくA組にそう言いゴーカイレッドに体操服を渡しそれを配るように指示をした。

ゴーカイレッドに渡された体操服に着替えたA組はグラウンドに集合した。

「個性把握テスト!?!」

「え?入学式はガイダンスは?」

「ヒーローを目指すから入学式なんて悠長な行事でる時間はないぞ。」

「ゴーカイレッド、お前体育のソフトボール投げの記録は?」

「何故俺なんだ。そう言うのは首席合格者がやるんじゃないのか?確か前は力が弱かったからほぼ平均より低いぐらいだよ。言っておくがゴーカイチェンジは使わないから

な。あれはこんな事に使うものじゃない。それに大丈夫なのか？こいつらの心を折りかねないと思うのだが」

「そうか。ならこれ使つて見本として全力で投げろ。これが終わつたらお前達は何もしなくていい。」

相澤先生はゴーカイレッドにボール型の機械を渡してそれを投げるように言いゴーカイレッドは円から出ないように全力でボールを投げ記録は？だった。

「おお流石ゴーカイレッド!!それにしても個性思いつきり使えんだ。面白そう。」

これを聞いた相澤先生は八種目全部の記録が最下位だったものは除籍処分すると生徒達に告げそこからA組の個性把握テストが勢いよくスタートした。

個性把握テストが終了して相澤先生により記録が表示され最下位だった葡萄のような丸い物を何個か頭に乘せた小柄の男子が膝を突き落ち込むが

「因みに除籍は嘘な。君らを焦らせて本気を出させて合理的虚偽」

「あんなの嘘に決まつてるじゃない。少し考えれば分かりますわ」

「いや。相澤はああ言っているが本気でお前達を見込みがなければ除籍してた筈だ。それに去年の一年生は皆入学初日で除籍処分を喰らっている。だからって気を抜いたり相澤の優しさに甘えたりするなよ。言っておくが俺は相澤や他の教師と違って甘くな

いからな。じゃあ教室に戻ってカリキュラムがあるらしいからそれを読んだら帰っていいらしい。じゃあ俺達はこの辺で」

相澤先生のその言葉にゴーカイジャー、ツーカーイザー、一部の除く生徒全員が声をあげて驚きポニーテルの少女が呆れながらそう口にするがゴーカイレッドはそれを否定するように相澤先生がやろうとしていた事をA組全員の前で容赦なく説明した。

「おい。ちよつと厳しく言い過ぎじゃないか？ まあ言いたい事は分かるけどお前生徒達の心を折りたくないとか言っておきながら思いつきり折りそうな事言ってるじゃないか。まあお前の夢を否定したあの男みたいにこいつらの夢を否定してないからマシだからまだいい方だけど。ごめんな。こいつちよつと言いつきついでで本当はいい奴だから悪く思わないでやってくれ。今の言葉もお前達を思って言った筈だから。でも俺もこいつも相澤よりヒーロー基礎学などの授業の時は甘くないしかなり厳しくいくから覚悟しておけよ。」

ツーカーイザーはゴーカイレッドのフォローをするように言う他五人と共にその場から去っていた。